地震と書簡

水野眞理

はじめに

1580 年 4 月 6 日に起こったドーヴァー海峡を震源地とする地震は、英国での記録上 2 番目に大きな地震であり、人々の心に大きな不安とともに記憶されることになった。イングランド南部にもたらされた物的・人的被害の記録に加え、その原因と意義について述べたパンフレットが多く残されている。本発表ではその主なものを紹介し、当時の地震に関する科学的、宗教的理解について考えたのち、エドマンド・スペンサーとゲイブリエル・ハーヴィの間で交わされたとする書簡集(1580)に挿入されたこの地震への言及の特異性を指摘する。

地震に関するパンフレット

16世紀のヨーロッパ人にとっての地震の原因は、地下に閉じ込められた蒸気や風が出口を求めて暴れることで大地が揺れる、というものであった。古代の人々がおそらく直観的に火山活動と地震との間に見出した類似にもとづくこの説は、アリストテレスからオウィディウス、プリニウスら古典作家を経由して初期近代のヨーロッパにも伝わっていた。この説が地震の物理的原因を説明するものとすると、1580年の地震はその宗教的原因を英国人に考えさせ、多くの出版物を生んだ。

地震発生の直後にカンタベリー大主教の発案に基づき、神の怒りを鎮めるための祈祷の命令がその大主教区全体に出された。地震は神の「怒り」の現われ、という明白な理解に基づくこの文書は、約2ケ月後、聖書の朗読すべき箇所と祈祷の文言を加えて女王から枢密院を通じて英国の全ての主教区に発出された。

地震の 2 日後に発行されたトマス・チャーチヤードのパンフレットは地震を神の「警告」として捉えている。チャーチヤードは地震の原因を大地に求める自然的議論に否定的であり、地震を別種の自然すなわち supernatural な事象と解し、地震の奇跡的な様相を神の来臨の証拠ととらえることを主張する。

劇作家アンソニー・マンデイのパンフレットは殺人事件、奇形の子供など、夥しい異常な事象を神の不興の例示として列挙する中で地震を挙げ、今回の地震もノアの洪水と同じことが再び起こる警告だという。

オウィディウス『変身譚』の英訳者(1567)として知られるアーサー・ゴールディングは、『変身譚』中の北風ボレアスの自慢を引きつつ、地震の物理的原因として上記のアリストテレスに起源をもつ地下に閉じ込められた風を挙げる。これは神話であると同時に当時としては合理的な地震の説明でもあった。しかし、ゴールディングは実際の地震を経験して、「神の業」としての地震理解に傾く。

トマス・トゥワインはまず一般論としての地震の発生や兆候を論じ、土地によって発生の時刻が異なるという重要な発見も書き留めつつも、それらの natural causes に関する知識を与えられたのは神である、と見る。ケンブリッジで医学を学んだトゥワインは、科学と信仰を両立させた例と見ることができるだろう。

エイブラハム・フレミングのパンフレットは、オーストリア出身のカトリック聖職者ナウゼアの『驚異の本——再考』(1532)の中の地震論の英訳を主たる内容とし、そこにフレミング自身の意見とノルマン・コンクエスト以来の英国の地震の歴史を加えたものである。ナウゼアは聖職者としては珍しく、地震の原因をアリストテレス的自然的要素に求め、さらに、雷を地震の原因とする説にも言及している。しかし英訳者のフレミングはこれらの説を紹介しつつも、結局地震とは神がこの世の邪悪さに対して示す「怒り」が原因だとし、自然的原因に頼ることは、神への不信から無神論、神への冒瀆に至る道であるとしている。

これらのパンフレットから看取できるのは、地震を natural cause によるものとする、いわば唯物論か、神 supernatural cause によるものとするか、で当時の人々が揺れていたことである。後者は、地震の原因と地震の意義を不可分のものとしている。

ハーヴィの地震論

スペンサーとの往復書簡においてハーヴィは、地震を題材に自らの合理的思考をつきつめようとする。ハーヴィはケンブリッジのトリニティ・ホールの学寮長まで務めた修辞学者・論客で、のちに寓意ロマンス『妖精の女王』を書くことになるスペンサーとの友好関係と、1590 年代のトマス・ナッシュとの敵対関係で知られる。

往復書簡集の前半は、地震の直後、1580 年 4 月初旬に二人の間で交わされたとする、英詩の音量による作詩法に関する往復文学論の間に、地震に関するハーヴィの長い記述を挟んだもの、後半は、時間的には遡り 1579 年に二人の間で交わされた英詩の改良論である。書物は匿名で出版されているが、書簡の本文中ハーヴィはイニシャル G.H.とラテン語名 Harueius で、スペンサーは前年の牧歌詩集『羊飼の暦』同様の偽名 Immerito（無価値な者）とラテン語名 Edmundus で登場し、教養ある読者には書簡集の著者は明らかである。

ただ、ハーヴィからスペンサー宛の地震に関する文章にはスペンサーからの返信はなく、実際の書簡というよりも書簡を装った地震論と呼ぶにふさわしい。書簡としての日付は地震の 3 日後の 4 月 9 日となっているが、内容の分量と濃さから判断して、この日付は虚構であろう。英詩に関するやりとりの中に、わざわざ地震に関す

る論説が挟み込まれるという、いかにも緊急性があるかのような不自然な構成は、地震という非日常の日常への侵入を書物の中にも再現しているかのようである。しかしこの書簡集の出版が 6 月であることを考えれば、緊急性もまた虚構であることがわかる。ハーヴィは書簡集出版の準備中に地震を経験し、6 月までに矢継ぎ早に出版された「神の怒り・警告」系パンフレットに対抗して、それらへの嘲りを含む独自の地震論を強引に挿入したと推測される。往復書簡集とは、実際に交換された書簡であるかどうかにかかわらず、私的な行為の典型である書簡執筆を、時事をちりばめつつ公にするという極めて演技的な共著の出版形態である。

1580 年 4 月 6 日の夕刻 6 時ごろ、ハーヴィは知人である紳士の家で強い揺れを感じ、居合わせた婦人たち向けに地震を合理的に説明する。次に家の主人の求めに応じて、新たに項を立てて地震に関する知識と考察を披歴する。続いて、地震を迷信的にとらえることへの反駁として、イタリアの思想家ピコ・デラ・ミランドラによる占星術の否定に触れ、最後に最近の学問のレベルの低下を嘆く、という体裁をとっている。

ハーヴィは地震を natural なものとし、その原因をアリストテレスの四原因説、すなわち内的要因としての形相（Formal）因と質量(Material)因、外的要因としての作用(Efficient)因と目的(Final)因、に求める。形相因には地震という大地が揺れる事象そのものを、質量因にはアリストテレス的な蒸気や風を、作用因には自然を創造し継続し修正する神を当てはめ、そのゆえに地震は超自然 Supernatural の現象でもあるとするが、土星、木星、火星の影響も否定しない。目的因としては、地下に閉じ込められた風が本来の場所に戻ろうとすることをあげ、多くのパンフレットが主張する、神が邪悪なものを罰するため、人間たちに警告を与えるため、といった「目的」を否定する。また、人間が神の意思を計り知れるものではない、という宗教的不可知論に基づき、今回の地震にしても一般の地震にしても、神の仕業であると断言する勇気はない、とも書いている。ハーヴィの地震理解は、時代的な制約はあるものの、知的な真剣さを持つとともに合理的であるとみることができる。

ハーヴィのその後とスペンサー

ハーヴィは地震の質量因を述べる中で風に触れたのち、オウィディウスの『変身譚』15 巻から、地下の風が地表を膨らませて山を作る様子を引用する。その中の「[息が] 革袋をふくらませるように」という一行が 13 年後のナッシュに対する攻撃パンフレット『ピアスの超義務—古い馬鹿に新しい称賛』(1593)の中で論敵への痛罵となって蘇る。大地にあいた空洞のイメージが、高慢で空疎な人物の描写に転用されて「荒れ狂う胆嚢と膨れ上がる膀胱（革袋）」（p.184）となるのである。

ハーヴィからの書簡でその地震論を読んだことになっているスペンサーに対して、ハーヴィの地震論は期待したほどの影響をもったとは言えない。スペンサーの代表作である『妖精の女王』(1590-96)においては、地震はそれ自体が災害としては言及されず、大きな力の象徴として用いられる。たとえば、第 1 巻で巨人オーゴリオーの棍棒による一撃が戦いの相手をそれて地表を打つ、という場面が地震の比喩で語られる。オーゴリオーの名前が意味する「高慢」にアリストテレスの地震論が結び付けられている。ハーヴィが情熱をこめて論じた地震は、スペンサーにあってはその哲学性をすべて失い、高慢で力だけは強い存在のイメージに還元されてしまう。執筆時期から見ると、スペンサーが『妖精の女王』にオーゴリオーを登場させ、それが、のちにハーヴィのナッシュに対する揶揄を引き出した可能性がある。ハーヴィもまた、自らが心血を注いで論じた地震に関するそれ以上の探究を放擲し、ナッシュとの品位を欠いた悪口バトルで消費していくのである。

参照文献

Church of England. *The order of prayer vpon Wednesdayes and Frydayes, to auert and turne Gods wrath from vs, threatned by the late terrible earthquake*....London, 1580.

Churchyard, Thomas. *A warning for the wise, a feare to the fond, a bridle to the lewde, and a glasse to the good....* London, April. 8, 1580.

Fleming, Abraham, *trans. and ed. A bright burning beacon, forewarning all wise virgins to trim their lampes against the comming of the Bridegroome....* London, 1580.

Golding, Arthur. *A discourse vpon the earthquake that hapned throughe this realme of Englande, ...* London, 1580.

Harvey, Gabriel. *Pierces supererogation, or A new prayse of the old asse....* London, 1593.

Harvey, Gabriel and Edmund Spenser. *Three Proper and Wittie Familiar Letters: lately passed between two Universie Men: touching the Earthquake in Aprill Last, and our English Refourmed Versifying....* London, 1580.

Anthony Munday, *A vievv of sundry Examples Reporting many straunge murthers, sundry persons periured, signes and tokens of Gods anger towards vs....* London, 1580.

Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*. London, 1590-96.

Twyne, Thomas . *A shorte and pithie discourse, concerning the engendring, tokens, and effects of all earthquakes in generall....* London, 1580.

アリストテレス『気象論』三浦要訳『アリストテレス全集６』所収。岩波書店 2015.